

ある患者さんが言っていた。その紹介した患者さん(子供)の付き添いで来ているお母さんが、「子供の鍼治療に付き添っていると、お腹が鳴って恥ずかしい」と言っていると。普段はそんなにお腹が鳴っているわけではないのに、子供の治療の時になると、やたらと鳴るといふわけである。

お腹がキュルキュルとかグルグルとか鳴ることを「腹中雷鳴」と言う。胃腸の働きが悪く、多くの場合、水が溜まっていて、何かの刺激で急に胃腸が動く時の音である。

治療している患者本人のお腹が鳴るのは、もちろんよくある事だが、付き添いの人のお腹が鳴る事も珍しくない。患者本人よりも付き添いの人の方がよく鳴る場合もある。

鍼治療は本来、気功治療である。鍼は気を操作する道具に他ならない。刺す手法ばかりでなく、接触鍼法もあり、私の場合には鍼かざし(空中鍼)もする。身体は物理的な身体を含んで氣的身体、つまり気場がある。治療室では、私と患者と付き添いの人の気場が干渉し合っている。私の気場は治療の時には強くなって影響力を増す。私の気場は特に鍼先に集約されて患者に向けられるが、その影響は治療室内の気場に影響する。かくして付き添いの人の気場にも当然影響するわけである。付き添いの人のお腹が滞りなく働いているならば、影響を受けても、「腹中雷鳴」は起こらないが、滞って水が停滞し、多少動き易い状態ならば、キュルと音を立てて動く。

水の停滞と言っても清水が溜まっているわけではない。度合の差はあるが、毒性を帯びた水、つまり水毒が溜まっているわけである。川の流れの中で流れにくく淀んだ場所をイメージしたらいい。全く流れていないわけではないが、流れが少なく、場合によっては

腐って悪臭を発生させている。

水毒は冷えの原因である。漢方薬でも冷えが強い時に配合する生薬である附子(トリカブト)や乾姜(ショウガ)は利水剤である。

水毒がある部分は働きが低下していて、冷える傾向にある。お腹を触れて、当に冷たく感じられる場合では、たいてい何らかの急性症状が出ている。病とは寒熱分離の状態である。寒とは冷えである。本来、循環が滞りなく行われていれば、全身がほぼ一様で、寒熱分離が起こっていない。基本的な寒熱分離は、胸から上が熱、腹から下が寒という分離であるが、寒熱分離は様々に起こる。

例えば鼻炎がある場合、鼻に熱がある。西洋医学と違い、東洋医学はお腹にある寒も見て治療する。鍼や生薬によって、寒を温め、熱を冷まし、そして全体の循環を促す。鼻の熱を取る軽い鍼をすると、よく「腹中雷鳴」が起こる。寒と熱は分離しているが、つながっている。

例えば関節リウマチの場合、血毒が全身に流れ、構造的に滞り易い関節に淀み、そのスジを痛ませる。関節に熱があり、お腹に寒がある。関節の熱を取る軽い鍼をすると、よく「腹中雷鳴」が起こる。

「陰主陽従(いんしゅようじゅう)」という言葉がある。目立っているもの(陽)の陰(かげ)にその現象の主体(陰)があるという意味である。熱は陽であり、寒は陰であり、病の主体は寒にある。鼻炎にしろ、関節リウマチにしろ、腹中の水毒を除いて行く治療が必要である。

さて、かのお母さんも子供に付き添っているだけでなく、治療が必要な方であることを「腹中雷鳴」は教えてくれている。

(2007年6月芒種)